Pick up!

PLAY HOUSE

芸劇レパートリー マームとジプシー「cocoon」

原作：今日マチ子（「cocoon」秋田書店）　作・演出：藤田貴大　音楽：原田郁子

MUM&GYPSY「cocoon」

撮影：井上佐由紀

延期から2年、解像度がさらに上がってきた

沖縄戦を背景に、少女たちの他愛ない日常とそのあと直面する現実を描いた今日マチ子原作、藤田貴大演出「cocoon」。藤田に、7年ぶりとなる上演への思いを聞いた。

1945年の沖縄戦に動員される少女たちを描いた漫画家・今日マチ子の代表作の1つ、「cocoon」。2013年、同作に感銘を受けた藤田貴大は、その作品世界を言葉と身体と音楽によって舞台化し、2015年には沖縄を含む6都市ツアーを行った。「史実に基づいた内容だけに、再演には心の準備が必要」と話す藤田は、5年の時を置いた2020年、異なる演出バージョンで3度目の「cocoon」上演を決意。しかし、新型コロナウイルスの影響により、公演は延期となった。

「2年前、かなりギリギリまで悩んで延期を決めました。そのときみんなに話したのは、いつ公演できるかはまだわからないけれど、次にできるときのために定期的に集まって、『cocoon』の作業を続けたい、ということ。それから2年、今日さんや音楽の（原田）郁子さんとも話し合いを重ねてきましたし、キャストやスタッフとも１か月に1回は集まってクリエーションを続けてきました」

「cocoon」のクリエーションが継続する一方で、今年2月には沖縄と東京で約2年ぶりの新作「Light house」を発表した。「Light house」は藤田が沖縄でのリサーチや体感を基に、現在の沖縄に流れる時間や空気を描いた作品で、海の向こうや過去・現在・未来など、目に見えない遥か遠くへと思いを馳せる、「cocoon」や「BOAT」にもつながる壮大な世界観の作品となった。

「cocoon」（2015年）

「当初は2020年の『cocoon』で戦時中の沖縄については一度区切りをつけ、『Light house』で今の沖縄を描く予定でした。その順番が逆になり、自分の中の流れが変わってしまったことに戸惑いもあったのですが、今はこれが自然な流れに感じています。というのも、『Light house』では沖縄本島の北部について描こうとしていたのですが、水が北部から南部へと流れることや“地下世界”のイメージが広がったことで、自然と南部での激戦を舞台にした『cocoon』につながっていったんです。『Light house』によって自分の中で思いが一周できた感覚がありますし、沖縄に対して意識が“開けた”感じがする。そんないろいろなことがつながって、今年のツアーに臨めそうです」

2年越しの稽古が本格始動し、藤田は早くも手応えを感じているという。

「2年間クリエーションを継続してきたことで、2020年にやる予定だったときよりも演出プランの解像度が上がってきています。またウクライナ侵攻によって戦争という響きも変わり、改めて、戦い方もその後の蹂躙（じゅうりん）の仕方も77年前とほぼ変わっていない。これは昔の話ではないんだな、と感じます。そういった点でも、『cocoon』はぜひ観に来てほしい。普段、自分の作品を観に来てください、と言うのはあまり好きではないのですが、この作品に関してだけは、いろいろな人――特に学生にぜひ観に来てほしいです」

取材・文：凛

7月9日㈯～17日㈰
プレイハウス 詳細はP8へ

原作：今日マチ子（「cocoon」秋田書店）
作・演出：藤田貴大（マームとジプシー）
音楽：原田郁子
出演：
青柳いづみ　菊池明明　小泉まき
大田優希　荻原綾　小石川桃子
佐藤桃子　猿渡遥　須藤日奈子
高田静流　中島有紀乃　仲宗根葵
中村夏子　成田亜佑美
石井亮介　内田健司　尾野島慎太朗

長野、京都、愛知、福岡、沖縄、埼玉、北海道・伊達、北海道・士別公演あり

特設WEBサイト
http://mum-cocoon.com/

Pick up!

THEATRE EAST

気づかいルーシー

原作：松尾スズキ（千倉書房『気づかいルーシー』）　脚本・演出：ノゾエ征爾

“Kidukai Lucy”（thoughtful Lucy）

対象を限定してつくるのは失礼なこと

芸劇初のこども向けオリジナル作として15年に誕生、17年に再演、その後もラブコールが続いた人気作が５年ぶりに上演。脚本・演出・出演のノゾエ征爾の思いは？

撮影：阿部章仁

「気づかいルーシー」（2015年）

こども向けの優れた作品は、結果的に対象の年齢を選ばない。そして、こどもにはこれから長く役に立つ感覚を、大人には深い気付きをもたらす。「気づかいルーシー」はまさにその好例で“こども向け”と謳ってあるものの、本当は“全世代向け”と伝えたい。

「そうなんです。“こどもはこういうことを喜ぶでしょ？”と考えたところで、そんな狭い世界観じゃないと思うんですね、こどもが見たり、引きつけられたりするものって。こどもじゃなくても、誰か特定の人たちを意識して、そこに向けて媚びるようなつくり方をしていくのって、失礼というか、表現自体がそんなに簡単なものじゃない。以前から『ルーシー』をこども向けだと考えていると、こっちがえらい目に遭うぞと思ってつくっていましたが、今回はますますその気持ちが強いです」

と、初演、再演に続いて演出を手掛けるノゾエ征爾。そもそも原作が、個性的な人気俳優を数多く擁する大人計画の主宰・作家・演出家・俳優の松尾スズキの絵本で、パワフルで愛らしい少女が主人公でありながら、テーマが“気づかい”。気づかいゆえに生まれるボタンの掛け違いが、見えている姿は本当にその人かという哲学的な問いと、さらにポップな笑いとともに描かれ、舞台化はなかなかの難物だった。

「高齢者施設で定期的に演劇をやったり、芸劇前の広場で出演者80人の野外劇をやったり、僕はわりと条件付きのお仕事を受けることが多いんですけど、むしろそれに燃えるほう。（完成した作品を）観た他の演出家に“こんなにおもしろい仕事だったんだ”と思わせたい(笑)」

その意欲が、大きな積み木のようなセット、田中馨と森ゆにによるオリジナル音楽の生演奏、アッと驚くビジュアル的な仕掛け、明るさとのんきさにスリルと少しの苦さが混じる、世代を超えた舞台を生んだ。

「でも前回の台本を自分で読み直すと、やっぱりまだ遠慮というか、“原作をわかりやすく伝えるには”という気持ちが強かったように感じます。表現として純粋なものを追求することがお客さんとの対話で、自分はそれがしたいんですね」

心強い味方が、５年ぶりでもほぼ全員が同じ顔ぶれで集まった俳優陣。

「みんな、５年の間に（活躍の場が広がって）かなり立ち位置が変わったし、同じ役を演じるプレッシャーもあったはずなのに、よく受けてくれたなと。この数年で“気づかい”という言葉の持つイメージも変わったと思うんですが、台本に手を入れるというより、稽古場でみんなに“今、何がおもしろい？”と話しながら新しい作品づくりを進めたいです」

取材・文：徳永京子（演劇ジャーナリスト）

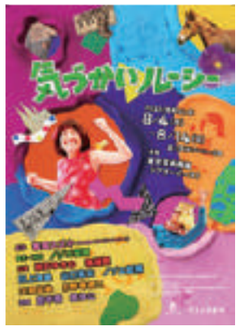
撮影：鈴木稼蔵

撮影：相澤心也

2022年8月4日㈭～14日㈰ ※8月3日㈬プレビュー公演
シアターイースト 詳細はP10へ

原作：松尾スズキ（千倉書房『気づかいルーシー』）
脚本・演出：ノゾエ征爾
出演：岸井ゆきの　栗原類／川上友里　山口航太　ノゾエ征爾／大鶴佐助　小野寺修二
演奏：田中馨　森ゆに

神戸、東広島、松本、北九州、水戸、東京（多摩）公演あり



＊新型コロナウイルス感染症にかかわる諸般の事情により、掲載情報に変更がでる場合がございます。最新情報は、東京芸術劇場ホームページ等でご確認ください。